真・恋姫無双　時空の旅人

ねくろまんせー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫無双　時空の旅人

【Ｎコード】
Ｎ５１８９Ｕ

【作者名】
ねくろまんせー

【あらすじ】
なぜか既に二つの世界を回っていた時空の旅人、銀孟（しろがねはじめ）
次に到着したところは恋姫の世界！
彼は見事この世界でハーレムを作れるのか！？（趣旨がちがうｗ）

第一幕　曹操との出逢い（前書き）

駄文です

適当にみてやってくださいまし

第一幕　曹操との出逢い

この旅を始めて幾星霜、この俺、銀孟（しろがねはじめ）は色々な世界、場所を見聞した

ある時は、子供先生が魔法使いな主人公がいる世界

ある時は、ヒキコが世界を救う、そんなヒキコな主人公がいる世界

――――

ありとあらゆる世界（と言ってもまだ二つだけだが）を経験してきた俺の次の生きる舞台が――――――

「……荒野」

荒野が広がるこの世界
俺はまだ知る由もなかった、この世界では

――――俺が主人公だということに

「で……結局ここは何処なんよ」

俺は辺りをぐるりと見渡してみる
見えるのはどこもかしこも荒野のみ

「今回は勝手が違うということなんか？」

一応リュックに詰めてきた非常食が役に立ちそうだ
俺はポケットを漁る。ハンカチにお金にケータイ――――

「ケータイ？」

ケータイがあれば連絡できるじゃないか、ラッキーだな俺
そう思い、パカッと折りたたみのケータイを開くと、そこには絶望の二文字が

「……圏外…か」

電池は幸いかどうかは分からないがソーラー電池なので日中充電すれば電池切れにはならないだろう
まぁ、最低限の機能しかないケータイなので圏外になると無用の長物になるのだが
後はミスリル銀で作られた太刀と大鎌、そしてＳＵＮ・グラッシーＪｒ．？（未だに未開封）。後は魔法発動体となる指輪だ
太刀と大鎌はミスリル銀の精霊、エリーゼ・ミスリライトが制作し指輪は吸血鬼の真祖、エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルから貰い
ＳＵＮ・グラッシーＪｒ．？は『ドクター』こと葉月の雫に無理やり渡された
ＳＵＮ・グラッシーＪｒ．？は使うことはないだろうが、武器と指輪は有難かった

「取り敢えず、歩くか。何もしないよりはましだ」

持ち物を確認し、ケータイをポケットに捻り込もうとして――――

「おう、兄ちゃん珍しいモン持ってんじゃねえか」

この世界の住人に声をかけられた
声をかけた中肉中背の男でヒゲを生やした壮年の男にもう二人
背が低い男に太った男
見た目はバラバラだが身に付けている衣服は共通している

「なんだ？俺に何か用かい？」

「ああ、ちぃーっと頼み事があるんだが」

そう言う男の表情はニヤついていて、正直キモイ
聞くだけ聞いてさっさとトンズラするか

「何だい？頼み事ってのは」

「金、出してもらおうか」

その言葉と共に頬に触れたのは冷たい鉄の感触
頬を叩くそれは包丁よりも大振りなナイフの刃
ああ、なるほど……こいつらは

“盗賊”

ということになる
だが、この世界の金など持ってはいないのだ
出しようもない金を出すことはできないので俺は素直につげた

「悪いが、金は持っておらんのよ。すまんな」

「なら、身ぐるみ剥いでいくまでだな」

仕方あるまいか
俺は腰を深めに落として、太刀の柄に手を掛ける
と、その時———

「待てぃ！！」

「っ！？」

「だ、誰だっ！？」

「たった一人の庶人相手に、三人がかりで襲いかかるなどとは……

その所業、言語道断！」

いや、庶人て……言い回しが古臭いなぁ

「そんな外道の貴様らに名乗る名など……無い！」

声が響いた次の瞬間、声の主から放たれた一撃が太った男の鳩尾に入る
太った男が倒れ始めると同時に、今度は背の低い男に一撃を見舞い、片付ける
背の低い男が吹き飛ばされて、その声の主はリーダー格をひと睨み
声の主は何ともうら若き乙女であったのだ
いやはや、俺がいる世界は否応に女が強いのだねぇ

「おやおや、所詮は弱いものをいたぶることしか出来ぬただの三下か？」

一つ言っておく
俺は弱くない！……はず

「くっ！……おい、お前ら、一旦逃げるぞ！」

「へ、へえ……」

「だ、だな…」

三人は敵わないと見るや、一目散に逃げ出した
いやはや、何とも雑魚っぽい奴らだ

「逃がすか！」

それを少女が追いかけていく
……さて、どうしたものかなぁ

「大丈夫ですかー？」

「んぁ？」

そのおっとりとした声に振り返ると、そこには
金髪の大人しそうな少女とメガネを掛けた真面目そうな少女が立っていた
どうやら、さっきの少女のお仲間みたいだ

「ああ、ケガもねーし大丈夫さぁ」

「そのようだ、取り敢えずはよかったというところか」

「ですねぇー」

二人の服装を見ると日本ではあまり見ない中華な格好だった
コスプレ――――にしては余りにも堂にいっている。これが私だ！みたいな
と、そこにさっきの少女が帰ってきた。この中では一番派手な格好である

「やれやれ……すまん、逃げられた」

「お帰りなさい。……盗賊さんたち、馬でも使ってたんですか～？」

「うむ。同じ二本足ならなんとかなるが、倍の数で挑まれてはな」

「まぁ、追い払えただけでも十分なのですよ～」

「それにしても、災難でしたね。この辺は比較的盗賊が少ない地域なんですが……」

比較的……ということはたまには出るということか
にしても盗賊か……ここは昔の日本か海外だな
だが、格好から見てもあの盗賊は日本には居ないだろう……

「全くだ……ふう」

「……ひへっ！？」

俺がため息をついた瞬間、金髪の少女は素っ頓狂な声を上げた

「貴様……っ」

少女が呟いた瞬間、盗賊に突きつけられていた槍の穂先が今度は俺に向けられていた
はて、何か言っただろうか？

「んぁ？俺…何か言ったか？」

「お主、どこの世間知らずの貴族か知らんが……いきなり人の真名を呼ぶとは、どういう了見だ！」

「て……っ、訂正してください……っ！」

「ん～……」

はて？真名……とかいうのを呼んだのか？俺は
だが、俺はこいつらの名前すら知らんのだが……

「訂正なさい！」

「うぅぅぅ……っ！」

はてさて……この少女達を怒らせたままでは不味いかな？
やれやれ……困った子達だ

「分ーったよ、訂正しよう。だからその槍を下げてくれんかね？」

「……結構」

「全く、こんな年端もいかない少女に消されるのは堪ったものではない」

もうすぐ三十路だ。せめて死ぬなら女の胸の中で死にたい

「はふぅ……いきなり真名で呼ぶなんて、びっくりしちゃいましたよー」

「ん～……俺は一体どこで真名とやらを呼んだのかねぇ？」

「言ったじゃないですか～、『全く……ふう』……って～」

「……ということは、君の真名は…」

「はい、風（ふう）ですよ～」

……なるほど
分かってしまえば何とも言えない虚無感が襲ってくる

「一つ、言い訳をしてもいいかい？」

「はい？なんでしょうか～？」

「俺は真名を呼んでいない。それはため息だ」

この俺の科白にその場の時間が止まった気がした
三人も「え……？」みたいな表情だ
まぁ……仕方ないんだけど

「ややこしい言い方をした俺も俺だったがな、すまんな」

「いいのですよ～、もう気にしてませんし～」

「そうか。ところで、まだ君たちの名前を聞いていないんだが……
良かったら聞かせてもらっていいかな？」

また、間違って真名を呼んでしまっては元の木阿弥である

「はい。程立と呼んでください～」

「今は戯志才と名乗っています」

程立は兎も角、戯志才は明らかに偽名だろ！
なんて思ってしまうほどに清々しい程に偽名だ
まぁ、それはさて置き……

「そちらのお嬢さんの名前は？」

俺は視線を槍をもった少女に移した

「私か？私は趙―――」

「星ちゃーん、問答はそこまでですよ～」

少女の言葉を程立が遮る
その程立の言葉に戯志才がさらに言葉を重ねてくる

「ここに官軍がやってきているようです」

「ふむ。では後は刺史殿に任せて私たちは失礼させていただきましょうか」

「何？」

戯志才の言葉に頷いた少女は二人と共にその場から離れようとする
よく見ると、旗に『曹』と書かれた軍隊が乱れなくこちらに向かっ

てきていた

「我々の様な者が貴族の御子息と居ると大概の者は良からぬことを想像してしまうものですよ」

「なるほど。だが、俺は貴族ではないぞ？」

確かに少々ダンディーではあるが？

「それはご自分で説明なされよ。面倒ごとは面白いが、官が絡むと途端に面白みが無くなるのですよ」

それは、分かるかもしれん
面倒ごとに首を突っ込むのはなんとも言えない面白さがあるのだ

「それでは、御免！」

「ではでは～」

そして、三人はこの場から立ち去ってしまった
ふむ、もう少し話していたかった三人ではあったな
そして、そのあとに現れたのは――――

人、人、人の大行列
正直、クソうぜぇ
そんな人垣の中から馬に乗った少女が二人のお供を連れて現れた

「華琳様！こやつは……」

「どうやら違うようね。連中はもっと年かさの中年男と聞いているわ」

ま、もう少ししたら俺も中年の仲間入りだがな

「どうしましょう？もしかしたら連中の一味かもしれませんし、引っ立てましょうか？」

「そうね……。でも、逃げる様子も見せないし……連中とは関係ないのかしら？」

「我々に怯えているのでしょう。そうに違いありません！」

「いやいや、あんたらに怯えるとか天地がひっくり返っても有り得んってよ」

俺は、懐からタバコを取り出そうとするも、それがないことに気づくそう言えば、マリアクレセルに取り上げられたんだったか。くそう

「あら……では私たちではあなたの胆を冷やす事は出来ないと言うのね？」

「まぁ、そう言うこった」

「ふぅん……面白いわね。あなた、名前は？」

「おいおい……名前を知りたきゃまず名乗れって。母ちゃんに教わらなかったか？」

「貴様！華琳様になんて口の利き方だ、素っ首刎飛ばしてやろうか！」

「春蘭、落ち着きなさい」

おいおい、どんだけ突っかかってくるんだ。まるで猛犬だわこれ
今にも噛み付きそうな女を少女が嗜める。俺から見たら三人とも少女なんだけど

「んんっ、失礼。私の名は曹孟徳。曹操と言った方が分りやすいかしら？そして、私から見て右手にいるのが夏侯惇元譲。左手にいるのが夏侯淵妙才よ」

「……何ぃ？」

俺は目を見開いてその三人を見る
信じられないだろう。“あの”曹操が見目麗しい少女なのだから

“乱世の奸雄、覇王・曹操”

後漢時代の歴史にその名を残す覇王は勿論、授業でも出てくる名前いやしかし、まさか魏の曹操、夏侯惇、夏侯淵が少女だったとは……スクープだな

「ちょっと、ぼーっとしてるけど、大丈夫？」

「んぁ？気にするな……っと今度は俺の自己紹介か俺の名前は銀孟（しろがねはじめ）だ。好きな酒は白乾児。時空の旅人だ、よろしくなぁ」

「……じく…う？？？」

「ああ、時空の旅人についてはおいおい話していく、楽しみにしてろ」

「そう……。あなた、生まれた国はどこ？」

「俺は生まれも育ちも日本だ！」

えっへんと胸をそらして自慢げに宣言……したのだが

「聞いたことないわ」

がくっと崩れてしまった俺
そう言えば、後漢時代はまだ日本って名乗ってなかったな……世知辛いぜ

「……華琳様、やはり引っ立てましょうか？かなり怪しいですし」

「そうね。刺史としては放っておくことも出来ないし、そうしましょうか」

「おいおい、税金は兎も角……治安を乱した覚えはないぞ？」

少なくとも、刺史の役割ぐらいは把握している
街の政事を行い、治安維持に務め、街やその周辺に蔓延る不審者や犯罪者を捕縛し、処罰する務めを行う者

「税金のことを抜いてもそれ以上にあなたの存在自体が怪しいのよ。春蘭、引っ立てなさい」

「はっ！」

「まだ連中の手掛かりがあるかもしれないわ。半数は一帯を捜索、残りは一時帰還するわよ」

何やら面倒なことになってきた
ま、非常食を使わずに済んだのは不幸中の幸いか
さて……これから俺はどうなるんだろうねぇ

これからのことに思いを馳せながら俺は連行されていった

第二幕　胡蝶の夢……か？

前回までのあらすじ

陳留の刺史、曹操に捕まり、引っ立てられた

「では、もう一度聞く。名前は？」

「銀孟」

「では、お主の生国は何処だ？」

「日本」

「……この国に来た目的は」

「目的か……正直に言えば、分からないと言ったところか」

「……ここまで、どうやってきた？」

「時空を旅して」

「……華琳様」

青い髪の少女、確か――――夏侯淵がため息混じりに意見を求めるように主の真名を呼ぶ
その主――――曹操も困った様子でため息一つ
隣の黒髪の少女――――夏侯惇は……分かってなさそうだ

「埒があかないわね……春蘭」

「はっ！拷問にでも掛けましょうか？」

「こら。事実しか言ってねーのに拷問とか非道ぇだろ」

さらっと拷問とか言う夏侯惇にちょっぴり焦ったぞ

「本当に埒があかないわね」

「後は、こやつの持ち物ですが……」

今、机の上にはリュックサックの中身がきれいに並べられていた
カップラーメンが五つ、おにぎりが二十個、白乾児が入った瓶が一本、２リットルＰＥＴのお茶が一本、ＳＵＮ・グラッシーＪｒ．？が一個（未開封）
後は、ポケットに入っていた、ケータイとお金。ハンカチ。武器は夏侯惇が持っている

「……どれも見たことがない物ばかりね」

そりゃそうだろうな
あ、白乾児は中国の酒だからそうでもないか？

「この箱は何かしら？」

「んぁ？……ああ、ケータイか」

「ケー……タイ…？」

曹操はまじまじとケータイを眺めている
ここにはない技術で作られている物に興味があるようだな

「携帯電話だ。大雑把に言ったら電波があればケータイを持った人と話せるんだぜ。まぁ、ここは電波もケータイを持った奴もいねーから使えないんだが」

「ふぅん……」

「この円柱状の物は何だ？」

夏侯淵が手にとっていたのは、カップラーメン
日本国民の愛すべきインスタント食品である

「おお、それはカップラーメンだ」

「かっ…ぷ……？？」

「お湯を注げば三分でラーメンが出来るスグレモノだ。味は保証しないがな」

「ふぅむ……不思議なものだな……」

「なんだ？この怪しい物は」

夏侯惇が手にとったのは、ＳＵＮ・グラッシーＪｒ．？

「はいはい、それは触らないでくれよ？只でさえ危ないんだから」

「むぅ、そうなのか？」

俺はそそくさとＳＵＮ・グラッシーＪｒ．？の入った箱を夏侯惇の手から取り上げて机の上に置く

あの『ドクター』作だ、使えば俺までヒデオのように痛いヤツの認識を受ける可能性がある

「どれも私達の世界には無い物品ね……」

「ということは、こやつの言っていることに嘘はないと？」

「そう判断せざるを得んだろう、姉者」

どうやら、牢獄で暮らさなければならないような事態は避けられそうだ
人類同士、話せばわかるものだ

「そうね。でも……これだけの物、この時代では作れないわ。貴方、何者なの？」

「そうだな……正直に言おうか。俺はこの世界から約１８００年後から来た未来の人間だ」

「「「――――は？」」」

この時、部屋の中の時間が止まった気がした

「……ということはこれ全部未来の品なの？」

「そう言うこった」

「確かに……これ全てを作れと言われても材料が無いだろうな」

「曹操がいた時代なら、漢王朝の時代か…それも、一度、新に滅ぼされかけて光武帝によって復興したあとの漢王朝」

「あら、そのあたりの知識はあるのね」

「まぁ、そこそこにはな」

伊達に麻帆良学園の教師はしていないのだ

「ふぅむ、ではどのようにこの時代にやって来たのだ？」

「それはわからんよ。いつも別の世界に行く際は一度寝る。次に目を覚ませば別の世界というわけだ。という訳で行き先は選べんのだ」

「むぅ……」

「理解は出来る。……が、未だに信じられんな」

俺が同じ状況でも同じことを言うだろうな

「取り敢えず、あなたがどうやって来たかは置いておきましょう。これからどうするのかしら？」

「そうさな……特に行く宛もない、ここから去ったところで受け入れてもらえるかもわかんねーしなぁ」

大概は曹操のところと同じく捕まるのがオチだろう……と思う

「そうでもないかもしれないわよ？その荷物とあなたの格好に現れた状況……とても“アレ”に似てるしね」

「……アレ？」

「“天の御遣い”よ」

「……天の御遣い？」

「ああ。『其の者、白き衣を纏い天より流星に乗ってこの国に降臨す。そしてこの乱世を終結に導かん』……大陸中にこのような噂が立っている。ただ、この予言をした管輅はエセ占い師らしくてな、あまり信用性は無いと見ている」

「成程、そんな噂に縋り付きたくなるぐらいにこの国は荒れている

のか」

「そういうことよ」

と、言われても俺は天の御遣いなんて大層な人間ではない
流星に乗ってやって来た覚えもないしな。どこのカー〇ィだ
などとつまらないことを考えていると、三人がこっちを見ていた

「と、言われてもそれはそんな立派な人物でもないんだがな。それに、まだ夢を見ているような感じだ……」

「……南華老仙の言葉に、こんな話があるわ

南華老仙……荘周が夢を見て蝶となり、蝶として大いに楽しんだ後、目が覚める
だが、それは果たして荘周である私が夢の中で蝶となったのか、自分が蝶であって、今夢を見て荘周となっているのか……それは誰にも証明できないの」

「ふむ、胡蝶の夢か」

「あら、多少は教養があるのね？」

「まぁ、それなりにはな」

伊達に麻帆良の教師ｈ（以下略）

「な、ならば華琳様は、我々はこやつの見ている夢の登場人物だとおっしゃるのですか！？」

「そうは言ってないわ。けれど、孟が私たちの世界に迷い込んできたのは事実、と考えることも出来るということよ」

いや、迷い込んだつもりはない……と言いたいが、言えない自分が居るわけで

「孟が夢を介してこの世界に迷い込んだのか、こちらにいた孟が夢の中で未来の話を学んできたのかは分からない。無論、私たちにもね」

「……要するに、どういうことです？」

「華琳様にも分からないが、少なくともここに銀がいる、という事は事実。という事だ」

「……うむぅ…？」

「それで分からぬなら、諦めろ。華琳様が分からぬことを姉者が理解しようとしたところで、知恵熱を出すだけだぞ」

「……むむむ」

「春蘭。色々難しいことを言ったけれど……この銀孟は天の国から来た御遣いだそうよ」

待て待て、俺はそんな高尚な……

「なんと……。こんな風采の上がらない男が天からの御使いなのですか？」

くっ……後でお仕置きしてやろうか
これでも結構モテスリムだったんだぞ

「おい、曹操……俺は……」

「あなたの言いたいこともわかるけれど、五胡の妖術使いや未来から来たなんて突拍子もない話をするよりは、そう説明したほうが分かりやすいのよ
　あなたもこれからは自分のことを説明するときは、天の国から来たと説明なさい」

「いや、似たようなもんだと思うけどな」

俺が天の御使いといったところで、胡散臭さは大爆発だ

「あら、なら五胡の妖術使いと呼ばれて、兵に突き殺されたほうがマシ？」

「全力で逃げようと思えば、逃げれるが……めんどくさいから天の御使いでいいわ」

ま、物は言いようってやつだな

「さて……疑問が解決したところでそろそろ現実的な話に入っていいか？銀」

「んぁ、何だ？」

「さきほど出た南華老仙の古書が盗まれてしまってな。その盗人を探していたのだ」

「……もしかして、オッサンとチビとデブの三人組か？」

「あら、そいつらの顔を見たのね？」

「ああ。その三人であってるならな」

夏侯淵から特徴を聞き、それに三人を照らし合わせていく
首領格は口ひげを生やした壮年の男。残りの二人はチビとデブの大男
見事、ピッタリである

「……少なくとも、聞いている情報と外見は一致するわね。……顔を見れば、見分けはつくかしら？」

「ああ。一番最初に会ったから、よく覚えてるな」
「そう。……なら、私たちの捜査に協力しなさい」
「ん～……まぁ、これも何かの縁だ…協力しようか」
「意外にすんなりと受けたな？」
「そうかい？まぁ、ここで一人になっても一文無しでぶっ倒れるのがオチだろうしな、それなら協力して食い扶持を稼ごうって事さ」
おにぎりもそんなに日持ちするわけじゃない
十日もすれば行き倒れになる可能性１２０％だ
「まぁ、俺に出来ることがあったら何でも言いな」
「良い心掛けね。なら、部屋を用意させましょう……好きに使うといいわ」
「了解」
「ふふ……。そうだわ、あなたの真名を聞いていなかったわね。教えてくれるかしら」
「真名か。生憎だが、俺は真名なんて無いぞ」
「ん？どういうことだ、銀」

「俺の居た世界では真名は無い。そうだな……強いて言えば孟が真名になるんじゃないだろうか？」

その言葉を聞いた三人が驚いた顔で俺を見る
いや、そこまで驚かんでも……って、習慣が違うから驚くのも無理はないか

「ならば貴様は、初対面の我々に……いきなり真名を呼ばせることを許していた……ということか？」

「そうなるだろうな」

そしてまたもや唸る夏侯姉妹
うーむ、唸る女性というのも中々に可愛らしいモノがある

「そうなると……私たちも真名を預けないと不公平でしょうね」

「そうなるのか？」

「そうなるのよ。孟、これからは華琳と呼んでいいわよ」

「ふむ…良いのか？」

「私が良いと言っているんだから良いのよ……あなた達も良いわね？」

そこで俺は夏侯惇を見て、至極真っ当な意見を言った
否、これを聞かずには曹操の真名は呼べんだろう

「夏侯惇に頸、刎ねられないだろうな？」

「ちょっと待てぃ！なぜそこで私を引き合いに出す！？」

「……じゃぁ、今……曹操の真名を呼んだら夏侯惇はどうする？」

「それはもちろん、首を刎ね――――……んんっ、ま…まぁ蹴りで勘弁してやる」

やだよ。夏侯惇の蹴り、いてーぞ、絶対

「春蘭、そういう脅しは慎みなさい」

「で、ですが……華琳様！こんなどこの馬の骨ともしれない男に、神聖な華琳様の真名をお許しになるなど……」

「あら、なら春蘭はこれから孟を呼ぶときはずっと貴様で通すつもり？」

「犬とかお前とかでいいでしょうに！」

……犬って…おい

本気でお仕置き逝っちゃおうか！？

「秋蘭はどう？」

曹操も何かしら否定してくれ
なんか、凹みそうだぞ

「ふむ……承知いたしましたとお応えしましょう」

「秋蘭！お前まで……！」

「私は、華琳様のお決めになったことに従うまでだ。姉者は違うのか？」

「むぅ……い、いや…私だってだなぁ……そ、そうだ！こいつの名前が本当に真名かどうかわからぬだろう……」

「そんなつまらない嘘をついているのなら、即刻頸を刎ねるまでよ」

これだけ言うのだ。彼女たちにとって真名がどれほどの重さを持っているのかがよくわかる
真の名……か

「孟、もしその存在に嘘をついているというなら……ふむ。今謝るなら、百叩きで許してあげるけど……どうする？」

「有り得ないね。天地神明に誓ってもいいさ」

「結構。ならこれから私のことは華琳と呼びなさい。春蘭もいいわね？」

「は、はぁ……」

こうして、俺は曹操――――華琳のところでお世話になることになった

はてさて、ここは新たな世界なのか、それとも胡蝶の夢か……

まぁ、生きていきゃわかるよな

第二幕　胡蝶の夢……か？（後書き）

しんどーい

第三幕　王佐の才

前回のあらすじ

華琳のお手伝い開始

「おお～、流石に壮観だな」

俺はいま、城壁の下を眺めている
華琳から用事を済ませる途中だった
その視線の先には、完全武装の兵士達が一糸乱れぬ動きで走っている
数千人規模の“それ”は、ここが現代でないことをまざまざと思い知らせてくる

「まぁ、クロスフラッグスでも五千人近くいたからそう驚くことでもないか」

――――クロスフラッグス

隔離空間都市で行われた聖魔杯
そのイベントで行われたサバゲーである
魔殺協会（まっさつきょうかい）とアルハザンの共同で開催されたそれは、大会参加者、非参加者を含めて約五千人が参加
魔殺協会陣営とアルハザン陣営に分かれ、勝負を争った

そして、城壁の下を走っている兵士達は1．5倍ほど居る

「……ただ、ここれだけの兵士が一糸乱れずに走っているのはすごいかもしれんな」

「どうした？そんな間の抜けた顔をして」

「んぁ？……ああ、春蘭か。いや、少しな」

春蘭の言葉に、少し言葉を濁して答える
つか、俺は間抜けな顔はしてねぇ

「そうか……。軍隊を見るのは初めてか？」

「…そうでもない……かな？」

軍隊だけなら、何回か見ている

「が、これほどの規模はそうそうは見なかったが」

「……この程度でそのようなことを言うのか？」

「基本的に平和だったんだよ、俺の居た世界はな」

「……そうなのか？」

まぁ、色々と世界的危機に晒されたりもしていたが……この際無視だ
春蘭と話していると、俺が一番聞きたくない声が耳に飛び込んできた

「……何を無駄話をしているの、二人とも」

その声は、泣く子も黙る（？）曹孟徳こと華琳の声。しかも少し怒っているようだ

「か……っ、華琳様……！こ、これは銀が……！」

「おい、そりゃ非道ぇだろうがよ」

「う……うるさいっ！」

どんだけ傍若無人なんだ、この娘は

「まったく……春蘭。装備品と兵の確認の最終報告、受けていないわよ。数は揃っているのかしら？」

「は……はいっ！全て滞りなく済んでおります！銀に声を掛けられたため、報告が遅れました」

……こりゃ、何を言ってもダメだろうなぁ

「で……その孟には糧食の最終点検の帳簿を受け取ってくるよう、言っておいたはずよね？」

「そうだったな」

まぁ、これに関しては俺は何も言えない
事実、サボっていたんだからな

「はぁ……なら早くなさい。あなたが遅れることで、全軍の出撃が遅れるわ」

「あいよ」

「……銀、監督官は今、馬具の確認をしているはず。そちらに行くといい」

「おう、すぐに行ってくる」

「さーて……厩舎厩舎っと」

……確か、馬具は厩舎の隣だったな
と、近くから怒号に似た声が聞こえ始める
覗いてみると、そこでは出撃準備をしている兵士達がいた

「おい！グズグズするな、さっさとしろ！」

「は、はい！」

「……流石に気合が入っているな……ん？」

男臭い場所で、ただ一人馬具の確認をしている女の子がいた
監督官の顔を知らないので、丁度良いとばかりに俺は女の子に声をかける

「そこの君、ちょっといいかな？」

「……」

「おーい」

「……」

周りが煩いから聞こえていないのだろうか？
否、そうであって欲しい。無視されているとなると、少し凹む

「おい、聞こえて――――」

「聞こえているわよ！全く、さっきから何度も何度も何度も何度も……一体何のつもり！？」

「いや、四回も言ってない……じゃなくて、聞こえているなら返事してくれてもいいじゃないか」

「アンタ何かに用はないもの。で、そんなに呼びつけて、何がしたかったわけ？」

この子、エリーゼに負けず劣らずの毒舌家だな
エリーゼはそれプラスにツンデレだったが

「糧食の最終確認の帳簿を受け取りに来たんだが……監督官は誰か知っているかい？」

「……何でアンタにそんなことを教えてやらないといけないのよ」

「うちの総大将……つまり華琳に頼まれたからだが？」

「な……っ！？……ちょっと、何でアンタみたいな奴が曹操様の真名を呼んで……っ！」

「既に許可は得ているが？」

「……信じられないわ、なんでこんな猿に……」

猿て……どんだけ俺の心を言葉の刺で突き刺すつもりなんだか

「っていうか、初対面だろう？少し失礼すぎやしないか？」

「ふん！……それよりアンタ、この間曹操様に拾われた天界から来た猿でしょう？……猿の分際で曹操様の真名を呼ぶなんて、信じられないわ」

「ほんと非道い言い草だな、君」

ヒデオなら、即自殺コース決定な科白がこちらに飛んでくる

「ふん！……で、何？私も暇じゃないんだけど」

いや、さっき言いましたけどね？聞き逃してるのかな？
それとも、俺への罵倒が忙しくてやはり聞き逃したのかな？
……まぁ、どっちでもいいか

「糧食の最終点検の帳簿を受け取るように、華琳から言われたんだ

が？」

「曹操様に！？それを早く言いなさいよ！このバカ！」

俺、もう泣（ゴール）いてもいいよね？

「もうバカでもなんでもいいから、監督官は何処だい？」

「私よ」

「ほう、『ワタシ』という人か、でそのワタシという監督官は何処？」

「……アンタ、脳味噌おかしいんじゃないの！？監督官は私！分かる！？このワ・タ・シが監督官なの！」

「へぇ、そうなんだ……君が監督官？」

「何よ、悪い？何か文句ある？私がここの監督官をしていることで、あなたの人生に何か致命的な問題でもあるって言うわけ？もしあるっていうのなら、そこのところを論理的に説明してみなさいよ。もし少しでもその論理が破綻しているなら嗤ってあげるからさ」

「いや特に無いよ。取り敢えず、監督官さん。糧食の帳簿をくださいな」

「……そのへんに置いてあるから勝手に持っていきなさい。草色の表紙が当ててあるやつよ」

お、これか……しかし、帳簿を取りに行くだけでえらく体力を使った気分だ
では、さっさと持っていくか……と、その前に

「あ、そうそう…さっきの致命的～のことなんだが……」

「何よ、論理的に説明する気になったのかしら？」

「違うよ。あれはただ君を小馬鹿にしていただけさ」

「な……っ！！？」

「ま、君の罵倒のお返し……ということで、さいならー」

走る俺の後ろからとんでもない罵声が響いていたが、耳をふさいで走り去った

「遅い！」

「悪い悪い、ちょっと手間取っちまった」

「全く……早速、帳簿を見せてちょうだい」

俺は、華琳に草色の表紙の紙束を渡した
華琳はそれを早速読み始めた

「ところで、何をしていたんだ？銀」

「そうだぞ！華琳様は随分と待たされていたんだぞ！？」

「ちょっとね、件の監督官とおしゃべりをね」

そんな会話をしていると、華琳が指を止めて一枚の紙をじっと見ている
俺はそれが気になり、横からチラリと盗み見た

「……なんだ？何か不味いことでもあったか？」

「ええ。秋蘭」

「はっ」

「この監督官というのは、何者かしら？」

「はい。つい先日、志願してきた新人です。仕事の手際が良かったので今回の食料調達を任せてみたのですが……何か問題でも？」

「ここに呼びなさい。大至急よ」

「はっ！」

「……遅いわね」

「遅いですなぁ……」

「そう、がなりなさんな。すぐに来るよ」

そう言った矢先に、秋蘭がひとりの少女を連れて戻ってきた
その少女は俺を見ては、怒り顔でひと睨みし華琳の方を向く

「華琳様、連れてまいりました」
「お前が食料の調達を？」
「はい。必要十分な量は、用意したつもりですが……何か問題でもありましたでしょうか？」
「必要十分って……どういうつもりかしら？指定した量の半分しか準備出来てないじゃない」
「へぇ、そうなのか？」
それにしては、この少女……不気味なぐらいに落ち着き払っているこの少女……何を考えている？
「このまま出撃していたら、糧食不足で行き倒れになるところだったわ。そうなったらあなたはどう責任を取るつもりかしら？」
「いえ、そうはならないはずです」
「何？……どういうことかしら」
「理由は三つあります。お聞きいただけますでしょうか？」
「……説明なさい。納得のいく理由なら、許してあげてもいいでしょう」
「……納得頂けなければ、私の不能が致すところ。この場で我が首、

刎ねていただいても結構にございます」

「……二言はないぞ？」

「はっ。では説明させていただきますが――――」

さて、俺は“もしも”の時のために……だな
俺は太刀の鍔に親指をかける

「……まず一つ目ですが、曹操様は慎重なお方ゆえ、必ずご自分の目で糧食の最終確認をなさいます。そこで問題があれば、こうして責任者を呼ぶはず。行き倒れにはなりません」

「ば……っ！　馬鹿にしているの！？……春蘭！」

「はっ！」

「おいおい、首を刎ねるのは最後まで話を聞いてからでも遅くは無いんじゃないか？」

「銀の言う通りかと。それに華琳様、先ほどのお約束は……」

「……そうだったわね。で、次は何？」

「次に二つ目。糧食少なければ身軽になり、輸送部隊の行軍速度も上がります。よって、討伐行全体にかかる時間は、大幅に短縮できるでしょう」

確かに、運ぶ荷物が少なければ自然と行軍速度は早くなる
今回は、元々の半分の糧食なので、スピードは格段に上がるだろう
だが……

「ん……？なぁ、秋蘭」

「どうして姉者、そんな難しい顔をして」

「行軍速度が早くなっても、移動する時間が短くなるだけではないのか？討伐にかかる時間までは半分にはならない……よな？」

「ならないぞ」

「よかった。私の頭が悪くなったかと思ったぞ」

「そうか、良かったな姉者」

「うむ」

……成程、何となくだが読めた気がする
だが、これは命懸けの“策”だな……

「まぁいいわ、最後の理由を述べなさい」

「はっ。三つ目ですが……私の提案する作戦を採れば、作戦時間は

さらに短くなるでしょう。よって、この糧食の量で十分と判断いたしました」

やっぱり、そういうことか……

「曹操様！どうかこの荀？めを、曹操様を勝利に導く軍師として、麾下にお加えくださいませ！」

「へぇ……」

この少女があの荀？か……
王佐の才と言われた曹操一の軍師がこんな可愛らしい少女だったなんてなぁ

「な……っ！？」

「なんと……」

「……」

順に、秋蘭、春蘭、華琳である
春蘭と秋蘭は驚いてるが、華琳は怒るでもなく、驚くでもなく……
只、見つめるのみ

「どうか！どうか！曹操様！」

「……荀？。あなたの真名は？」

「桂花にございます」

「桂花。あなた……この曹操を試したわね？」

「はい」

「な……っ！貴様、何をいけしゃあしゃあと……。華琳様！このような無礼な輩、即刻首を刎ねてしまいましょう！」

「あなたは黙っていなさい！私の運命を決めていいのは、曹操様だけよ！」

「ぐ……っ、貴様ぁ……」

「まぁまぁ……落ち着くんだ、春蘭」

俺は春蘭の肩をポンと叩いて、宥めすかせる
春蘭は「ぐぅぅぅ……」と唸って何とか落ち着いてくれた
まだ、飛びかかりそうな雰囲気だが

「桂花、軍師の経験は？」

「はっ。ここに来るまでは、南皮で軍師をしていました」

「……そう」

華琳の微妙な表情
俺はそれを見逃さず、秋蘭に問いかける

「秋蘭、南皮には誰が居たかな？」

「袁紹だ。あそこは袁紹の本拠地でな、華琳様とは昔からの腐れ縁でな……」

「なるほど」

そう言えば、三国志でも曹操と袁紹は盟友とかだった気がする
いやはや、なかなか気づかないものだな

「どうせあれのことだから、軍師の言葉など聞きはしなかったのでしょう。……それが嫌になってここまで流れてきたのかしら？」

「……まさか。聞かぬ相手に説くことは、軍師の腕の見せ所。まして主が天を掴む器ならば、その為に己が力を振るうこと、何を惜しみ、何を躊躇いましょうや」

「……ならばその力、私の為に振るうことは惜しまないと？」

「一目見た瞬間、私の全てを捧げるお方と確信致しました。もし不要とあらば、この荀？、生きてこの場を去るつもりは御座いませぬ。

遠慮なく、この場でお斬り捨てくださいませ！」

「……華琳」

「……」

俺は華琳を見て、太刀の鍔をカチリと鳴らして何時でも抜けるようにする

「……華琳様」

「春蘭」

「はっ！」

春蘭は華琳の命で、華琳の武器である大鎌を取りに行く

「華琳様……っ！」

華琳は秋蘭の言葉を聞かずに、戻ってきた春蘭から大鎌を受け取ると、それを荀？に突きつける

「桂花。私がこの世で尤も腹立たしく思うこと。それは他人に試されること。……分かっているかしら？」

「はっ。あえてそこを試させていただきました」

「そう……。ならば、こうすることもあなたの手のひらの上ということね……」

そう言い放ち、華琳が大鎌を構え、振り下ろす――――

俺はそれに合わせ、縮地を使い、一瞬で荀？と華琳の間の横６０ｃｍのところに移動。そして、太刀を抜き放つ

「な……っ！？」

「銀っ！？」

二人の声を聞きながら、俺は右手の太刀を振り――――

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

――抜かなかった

全員が無言の中、華琳は荀？の首元で大鎌を寸止めし
俺は、太刀の刃を大鎌の刃と華琳の手がある箇所のちょうど中間で
同じように寸止め

「……孟？」

「これは失礼。まさか寸止めするとは思わなかったんでな」

俺はおどけて太刀を鞘に納める

「当然でしょう。……けれど桂花。もし私が本当に振り下ろしていたら、どうするつもりだったの？」

「それが天命と、受け入れておりました。天を取る器に看取られるなら、それを誇りこそすれ、恨むことなどございませぬ」

「……嘘は嫌いよ。本当のことを言いなさい」

「曹操様のご気性から、試されたなら、必ず試し返すに違いないと思いましたので。避ける気など毛頭ありませんでした

……それに、私は軍師であって、武官ではありませぬ。あの状態から華琳様の一撃を防ぐ術は、そもそもありませんでした」

「……そう」

そう言い、華琳は大鎌をゆっくりと下ろす

「……ふふふっ　あはははははっ！」

「か、華琳様……っ！？」

遂に、気でも触れたか？

「最高よ、桂花。私を二度も試すその度胸とその智謀、気に入ったわ。その才、私が天下を取るために存分に使わせてもらう。いいわ

ね？」

「はっ！」

「なら、まずこの討伐行を成功させてみなさい。糧食は半分でいいといったのだから……もし不足したのならその失態、身をもって償ってもらうわよ？」

「御意！」

そう言うなり、荀？は残りの仕事のためにその場を去っていった

「では、あなたたちも荀？のことは真名で呼ぶこと。それは桂花にも徹底させるわ、いいわね？」

「はっ！」

「御意！」

「それにしても、桂花を守ろうとするなんて……惚れたの？」

「いやいや、うら若き乙女が命を落とす場面はどうも苦手でね。ついつい助けに入ってしまったんだよ」

「あら、なら私のことも守ってくれるのかしら？」

「もちろんです、姫」

そう言って、膝をついて華琳の手の甲にキス

その途端に、春蘭が激怒。俺は追われるようにその場を後にした

第四幕　天真爛漫（前書き）

更新、ちょー遅れました（ＴＡＴ）ゴメンヨー
なるべくもっと早く更新していきたいと思います

第四幕　天真爛漫

前回までのあらすじ

荀？が仲間になった！

さて。今、俺は曹操が持っていた、南華老仙の古書を盗んだ三人組が潜伏していると思われる賊の一団の討伐に曹操軍とともに向かっている

行軍速度は、馬が歩くよりも少し速い程度。もっと速いものと思っていたこともあり、これで大丈夫なのか心配になってくる

後で、桂花に聞いてみるか

「銀、馬には慣れたか？」

「ああ、何とかな」

騎馬戦は無理だが、走らせるぐらいなら出来るようになっている

…とはいえ、縮地を使って走る方が速いのだが、よっぽどの緊急時以外は使わないことにしている

「だが、彼女の胆力には驚いたよ」

「ああ、桂花か。確かに、あれには驚かされたな」

「だよなぁ。……噂をすれば影だな。桂花！」

「な……っ！アンタ、何で……っ！？」

「いや、華琳から聞いただろう？俺や春蘭、秋蘭のことは真名で呼び合うと」

「聞いていたけど、覚える気にならなかったわ」

「おいおい……随分とぞんざいな扱いだな」

「うっさいわね！……それに、古参の夏侯淵ならともかく、何でアンタなんかに真名を呼ばれなきゃなんないのよ！？私の大切な真名をアンタなんかに犯されてたまるもんですか！訂正なさい！」

犯されるって……ずいぶんと嫌われたもんだなぁ

「まぁ落ち着け。そんなことより、随分と無茶をやったけど、大丈夫なのかい？」

「そんなことじゃないわよ……」

「華琳様の命だ。素直に受け入れるんだな」

「っ……。……で、何が無茶なことですって？」

諦めたな。華琳の命じゃ仕方ないだろうな

「糧食を半分にしての強行軍さ。本当に大丈夫なのか？」

「別に無茶でもなんでもないわよ。今の曹操様の軍の実力なら、これぐらい出来て当たり前なんだから」

「俺は、軍に同行するのは初めてだから、よくわからないが……そうなのか？秋蘭」

「華琳様は知にも勇にも優れた御方だが、それを頼んで無茶な攻めを強いる御方ではないからな……。正直、こういう強行軍を実践で試すのは初めてだ」

「ここしばらくの訓練や討伐の報告書と、今回の兵数を把握した上での計算よ。これでも余裕を持たせてあるのだから、安心なさいな」

「……そうか」

「……なんか、言いたそうね」

「いや、そんなことはないぞ？」

「ふふ、その辺りの手並みはおいおい見せてもらうとしよう。……しかし、あのやりとりは胆が冷えたぞ」

「全くだ。普通に志願できなかったのか？」

俺のこんな質問に『なんでそんなこと聞くの！？』みたいな表情をされてしまった
いや、事情を知らないんだからそんな顔しなくても

「軍師として志願できていたなら、していたわよ」

「ということは、なんか事情があったのか？」

「それは私が話そう」

秋蘭の言葉に、俺は秋蘭の方を向く

「今回は、軍師の募集を行なっていなかったんだ。経歴を偽って申告する輩も多いのでな。個の武勇なら姉者あたりが揉んでやれば大体判断がつくのだが……文官はよほど名の通った輩でない限りは、使ってみないと判断がつかん」

「だから、一刻も早く曹操様の目に留まる働きをして、召し上げていただこうと思ったのだけれど……その機が思ったより早く来て、良かったわ」

「へぇ……」

とはいえ、あの強攻策を敢行するとはねぇ

「で、華琳様はどうだったのだ？」

「思った通り、素晴らしい御方だったわ……。あの御方こそ、私が命をかけてお仕えするに相応しい御方だわ！」

「……そこまで良かったのかい？」

「……ふっ。あなたのような木偶の坊にはわからないでしょうね。可哀相に」

「……君、俺に何か恨みでもあるのかい……？」

「別に。ただ単に嫌いなだけ」

本当に泣いてもいいかい？　……ダメ？

なんて、凹んでいると春蘭がやってきたので気分を切り替えてそちらを向く

「おお、貴様等、ここにいたのか」

「どうした、姉者。急ぎか？」

「うむ。前方に何やら大人数の集団がいるらしい。華琳様がお呼びだ。すぐに来い」

「わかったわ！」

「うむ」

「俺もかい？」

「……役に立つとは思えんが、貴様も連れて来いとの仰せだ、来い」

「ん、了解」

「遅くなりました」

「ちょうど偵察が帰ってきたところよ。　報告を」

華琳がそう言うと、華琳の後ろで兵士が膝をついたまま報告を始める

「はっ！行軍中の前方集団は、数十人ほど。旗がないために所属は不明ですが、格好がまちまちな所から、何処かの野盗か山賊かと思われます」

「……様子を見るべきかしら」

華琳がどうするか考えているところに、俺は一言だけ進言した

「気になるなら、もう一度偵察してみりゃいいだろう？」

「……それもそうね」

華琳が俺の言葉に頷けば、桂花が其れに続いて発言する

「では、もう一度偵察隊を出しましょう。夏侯惇、銀、あなた達が指揮を執って」

「おう！」

「俺もかい？」

「言い出しっぺのアンタが行かなくてどうするのよ！」

ま、そりゃそうだわな。ここは従っておくかね

「それに、夏侯惇の抑え役になってもらわないと困るのよ。嫌でもついて行ってもらうから」

「なるほど」

「おい！何を納得している！　それではまるで、私が敵と見ればすぐに突撃するようではないか！」

「違うの？」

「違うのかい？」

「違わないでしょう？」

「うぅ～、華琳様までぇ～……」

桂花、俺、華琳の言葉にいじけて俯いてしまった
やれやれ……少し不憫になってきたな

「まぁ、それはさて置き、私も出ると、こちらが手薄になりすぎる。其れにもし戦闘になった場合も姉者の方が適任。……そういう判断だな、桂花」

「そうよ」

俺の名前がないのは……まぁ、黙っておくか

「行ってくれるわよね？春蘭、孟」

「はっ！承知いたしましたー！」

「では銀、姉者の抑え役を頼むぞ」

「了解した」

「秋蘭までぇ～……」

「ふふ……。では春蘭、孟。すぐに出撃なさい」

という訳で、俺と春蘭は、春蘭の隊をまるまる偵察部隊に割いて、

本体から離れ、先行して移動を始めていた

「まったく、先行部隊の指揮など、私一人で十分だというのに……」

「まぁ、文句があるんなら華琳に直接言うんだな」

「くぅぅぅ……」

「まぁ、偵察も兼ねているからな。通りすがりの傭兵隊とかなら、突っ込んじゃぁダメだぞ？」

「貴様なんぞに言われるまでもないわ。そこまで私も迂闊ではないぞ」

「そうかい、ならいいんだが」

というか、迂闊じゃなかったら俺が付けられることは無いのではないだろうか？

といった疑問が浮かんだが、そんな音を口に出しては春蘭の怒りを招くことになる

ここは、静かに馬を走らせておくことにしよう

「夏侯惇様！見えました！」

「ご苦労！」

「ん～、あれかぁ……だが、行軍してないな。何かを取り囲んでい

る……？」

酒盛り……？
ってこんなところでしないよな。ということは……

「何者かと戦っているようだな」

お…何か飛んだな。遠目からではよくわからなかったが、よーく見てみるとそれは、普段からよく見ているものだった

「……人か」

そう、人。ｈｕｍａｎ。
普通ならば、驚くのだろうが…
前にいた二つの世界ではよく人が飛んでいたのでそこまで驚くことはなかった

「なんだ、あれは！」

「誰かが戦っているようです！　その数……一人！それも子供の様子！」

「なんだと！？」

「まさか……」

俺は三人ほど、頭に顔が浮かんだ
一人は、ネギ・スプリング・フィールド
一人は、犬上小太郎
一人は、リップルラップル

上の二人なら特に問題はないのだが……
問題はリップルラップルだ
二つ目に行った世界において隔離空間都市を作った、天界に住むマリアクレセルの姉
その彼女が本気を出せば辺りは瞬時に血の海だろう

「……ん！？おい、夏侯惇はどうした？」

「はっ、報告を聞いてすぐに馬を走らせていきましたが……」

「まずい…まずいぞ！」

俺は、春蘭に追いつくために、できる限りの速度で馬を飛ばして春蘭を追う
早まるなよ……！

「でええええええいっ！！！」

「ぐはぁぁっ！」

「まだまだぁぁっ！　でやあああああああっ！！！」

「がは……っ！！」

少女の裂帛の気合と共に放たれる鉄球によって男たちが吹き飛ばされる
その様子を見ていた野盗のリーダーがイラついた様子で仲間に叫ぶ

「ええい、テメェら、ガキ一人に何を手こずって！数で行け、数でよ！」

「おおぉぉぉ！」

その言葉に、野盗達は徐々に少女を取り囲んでいく

「はぁ……はぁ……はぁ……。もぅ、こんなにたくさん……多過ぎるよぅ……！」

ひとりごちる、少女の背後から野盗の一人が斬りかかる――――

「――――ぐはぁっ！！？」

と、さらにその背後から、その野盗が胴を薙ぎ払われ、声を上げながらその場に倒れる

「え……っ？」

「だらぁぁぁぁっ！！！」

驚いた表情の少女の横を春蘭が駆け抜けていき、野盗達を屠っていく

「ぐはぁぁぁっ！」

「大丈夫か！勇敢な少女よ！」

「え……！？あ……はいっ！」

「貴様らぁっ！！！　子供一人によってたかって……卑怯と言うにも生温いわ！　てやあああああっ！」

そうして、また一人、春蘭が斬り捨てる。その様子を少女はポカンとしてみていた

「ありゃぁ、曹操んとこの夏侯惇じゃねぇか！」

「何であんな奴がいんだよ！？」

「知るか！取り敢えず退却だ！全員逃げろぉっ！！！」

「逃がすかぁっ！全員、叩き斬ってくれるわ！」

「待つんだ！春蘭」

追いついた俺は馬から降りて春蘭の肩を掴み、止める

「ええい、邪魔をするな、銀！」

そう言いながら俺の手を振り払うことなく進もうとする春蘭

ぐっ……引っ張られる、なんて馬鹿力だ

「俺たちの仕事は偵察だ。その子を助けるのはいいが、敵を全滅させては意味がないだろう？」

「ふん、敵の戦力を削って何が悪い！」

「それもいいんだが、敵を完全に潰すためにやることがあるだろう？」

「む……例えば何だ？」

「例えば、今、逃げた敵をこっそり追跡させて、敵の根城を掴むとかな」

「おお、それは良い考えだな。誰か、おおい！誰かおらんか！」

「心配しなくていい。偵察ならもう出してあるよ」

「むぅ……貴様にしてはなかなかやるな」

「そりゃどうも」

…まぁ、武勇が極端に優れているだけあってあまり智勇の方は宜しくないようだ

加えて、敵を見れば猪のごとく突っ込んでいくこの性格では抑えをつけたくなる桂花の気持ちもわからなくもない

「あ、あの……」

そんな俺たちを見ていた少女がおずおずと話しかけてきた
確かに、俺がきてからほったらかしだったな
それにしても……リップルラップルじゃなくてよかった
俺は、心の底からそう思った

「おお、怪我はないか？少女よ」

「はいっ。ありがとうございます！　おかげで助かりました！」

「それは何よりだな。しかし、何故こんな所で一人で戦っていたのだ？」

「はい、それは――――」

少女がそんな話をしようとすると、ちょうど向こうから本隊がやって来た

「お、どうやら到着したようだ。華琳様ー！」

「……っ！」

……少女の気配が……変わった？
表情も厳しいものに変わっていた。…どういうことだ？

「…孟。謎の集団とやらはどうしたの？　戦闘があったという報告は聞いたけれど……」

「奴さん達、春蘭の勢いに負けて逃げてったよ。まぁ、数人、尾行につけてるから、根城はすぐに判明するはずだ」

「あら、なかなか気が利くじゃない？」

「はは、お褒めに預かり光栄だな」

そんな話をしていると、先程の少女がこちらにやって来た

「あ、あなた……！」

「ん？　この子は？」

「お姉さん、もしかして、国の軍隊……っ！？」

「まぁそうなるが……！？　ぐっ……！」

少女が明らかな敵意を持っていると判断した時には、既に遅く、放たれた鉄球を春蘭が大剣でガードし、その勢いのまま地面を滑りながら後退させられた

「き、貴様、何をっ！」

「国の軍隊なんか信用できるもんか！　ボク達を守ってくれないクセに税金ばっかり持っていって！」

この少女、どうやら国の軍隊を信用していないらしい
とはいえ、華琳の治める陳留やその周辺は特にそんなことはない
どうやら、誤解が生じているようだな……
少女は、再び鉄球を戻す

「てやあああああっ！！！」

そして、力のままに鉄球を振り下ろす！

ガキィィッ！！！

「くぅ……っ！！！」

「そう……だからあなたは一人で戦っていたというのね」

「そうだよ！　ボクが村で一番強いから、ボクがみんなを守らなきゃいけないんだっ！　盗人からも、お前たち……役人からもっ！」

「くっ！　こ、こやつ……なかなか……っ！」

「……春蘭、柄にもなく押されているな」

「そのようね。でも、押されている理由は単に実力の問題じゃないわ」

「ああ。確かに、あの子の実力はかなりのもんだ。末は春蘭と肩を並べる位になるかもしれん。だが春蘭はあの子の言っている事が頭に引っ掛かってるんだろうな。ただ向かってくるならば、斬ればいい。だが、相手は守るために戦っている……無碍には刃を向けられんだろう」

「そうね」

「桂花、俺が思うに…ここは華琳の治める土地ではないんだろう？」

「ええ。この辺の土地は曹操様の収める土地ではないわ。盗賊追跡の名目で遠征してきてはいるけれど……その政策に、曹操様は口出しできないの」

やはりな……ならばこれ以上の戦いは意味がない

俺は腰の刀の鍔を押し上げ、少し抜き、柄に右手を添える

「孟、何をする気かしら？」

「ちぃと、止めてくるよ」

俺は、笑みを浮かべてその場を後にした

「でええええええええええいっ！！！」

「ぐぅ！　仕方ないか……いや、しかし……」

そして、再び鉄球が春蘭に向かう――――が、それは春蘭に届く前に何かに弾かれ、明後日の方向に飛んでいく

少女が前を向くと、春蘭の前にさっきの男が立っていた。鉄球を弾いたのもこの男の人だろうか？

「そろそろ、止めねぇか？明らかに不毛な争いになってきているぞ」

「お前たちの都合なんてっ――――！！！」

そう言い放ち、少女は鉄球を頭の上で振り回し始める
あの小さな体のどこにあんな力があるのだろうか？　一度、ほむら鬼と力比べさせてみたいものだ

「春蘭、下がっていろ。うまく収めてみせる」

「お前こそ下がれ！あの少女、並みではない！」

「そのお前が本気になれんのだろうが。とっとと下がれ」

とんと、春蘭を押し出すそして俺は前を向き――――

「せえあああああああっ！！！」

その刹那に見えたのは迫る鉄球。俺は目を見開き――――

ドゴォォォン！

「銀！？」

「孟！」

俺の姿は鉄球の一撃によって完全にかき消された――――

「さぁっ、次は――――」

――――チャキッ

「“残心”――――相手の姿を確認しないまま勝ちを喜んでいては……こうなるぞ？」

そう言い放ち、俺は太刀の刃を少女の首筋に押し当てる。その俺の姿に、少女はおろか、華琳や春蘭たちも唖然としてた

「少しは、華琳の話も聞いてやってくれ……それだけだ」

俺は、刀を下げ、鞘に収めると、華琳のもとに歩き出す

それと同じくして、華琳が少女に向かって歩き出す
俺が、笑みを浮かべると、同じように笑みを浮かべる華琳。後は上手く纏めてくれるだろう

「先程は孟が失礼したわね。あなたの名前は何というのかしら？」

「は、はい……許緒と言います」

「そう……」

そう言って、次に華琳がとった行動に、一同…俺も含めて驚いた

「許緒……ごめんなさい」

「え……っ！？」

すっ……と、華琳は頭を下げたのだった

「曹操……さま？」

「何と……」

「……やるねぇ、華琳」

その姿に、俺は感嘆の声を上げていた
理由は分からない。が、華琳がそうしたかったんだろう
驚くものは居ても、止めさせたり、異を唱えるものはいなかった

「あ、あの……っ！」

「名乗るのが遅れたわね。私は曹操、山向こうの陳留の街で、刺史をしているものよ」

「山向こうの……？　あ……それじゃっ！？　ご、ごめんなさいっ！」

……どうやら、誤解は解けたようだな

「山向こうの街の噂は聞いています！　向こうの刺史様はすごく立派な人で、悪いことはしないし、税金も安くなったし、盗賊も少なくなったって！そんな人に、ボク……ボク……！」

「構わないわ。今の国が腐敗しているのは、刺史の私がよく知っているもの。官と聞いて許緒が憤るのも、当たり前の話だわ」

「で、でも……」

「だから許緒。あなたの勇気と力、この曹操に貸してくれないかしら？」

「え……？　ボクの、力を……？」

「私はいずれこの大陸の王となる。けれど、今の私の力は余りにも少なすぎるわ。だから……村の皆を守るために振るったあなたの力と勇気。この私に貸して欲しい」

「曹操様が、王に……？」

「ええ」

「あ……あの……。曹操様が王になったら……ボク達の村も守ってくれますか？盗賊も、やっつけてくれますか？」

「約束するわ。陳留だけでなく、あなた達の村だけでもなく……この大陸の皆がそうして暮らせるようになるために、私はこの大陸の王になるの」

「この大陸の……みんなが……」

ふ……華琳も言うじゃないか
皆が平和に暮らせる大陸に……か
俺がそんなことを考えていると、桂花が兵士からの報告を聞き、こちらにやって来た

「曹操様、偵察の兵が戻りました！　盗賊団の根城はすぐそこです！」

「分かったわ。……ねぇ、許緒？」

「は、はいっ！」

「まず、あなたの村を脅かす盗賊団を根絶やしにするわ。まずそこだけでいい、あなたの力を貸してくれるかしら？」

「はい！　それならいくらでも！」

「ふふっ、ありがとう……。春蘭、秋蘭。許緒はひとまず、あなた達の下に付ける。わからないことは教えてあげなさい」

「はっ」

「了解です！」

「華琳」

「あら、さっきはありがとう孟」

「万事、解決したようだな」

少し離れたところで、許緒が春蘭に頭を下げている
さっき、問答無用で攻撃したことを謝っているのだろう
春蘭が何かを話して、許緒が大きく頷いている

「……そろそろ、行軍を再開しないとな。大陸を住みやすくするためにな」

「ええ、そうね。……では、総員、行軍を再開するわ！　騎乗！」

「総員！　騎乗！　騎乗っ！」

華琳の号令と秋蘭の掛け声でまたたく間に騎乗を済ませる兵士たち
これも訓練の賜物であろう
こうして、曹操軍は一時的に許緒を仲間にして、一路、盗賊団の根城を目指していった

第五幕　ｖｓ黄巾盗賊団

前回までのあらすじ

許緒が仲間になった！

俺たちは今、盗賊団の根城である砦の近くに陣を構えている
盗賊団の砦は、山の影に隠れるようにひっそりと建てられていた
許緒と出会った場所からは遠くはなかったが、こんなに分かりにくい場所、盗賊を尾行していなければ見つけるのは困難だっただろう
その本陣の天幕では、俺を含めた武将四人と桂花、そして華琳が集まり軍議を行なっていた

「許緒、この辺に他の盗賊団はいるの？」

「いえ。この辺にはあいつらしかいませんから、曹操様が探してる盗賊団っていうのも、あいつらだと思います」

「敵の数は把握出来ているかしら？」

「はい。およそ三千との報告がありました」

「我々の隊が千と少しだから、三倍ほどか……。おもったよりも大人数だな」

秋蘭の言葉に春蘭が答えるように呟くと、桂花が「ですが……」と言葉を続ける
勿論、その視線は華琳に向かっている。決して、春蘭には向かない。いいのか？……いいか

「最も連中は、集まっているだけの烏合の衆。統率はなく、訓練もされておりません故……我々の敵ではありません」

「けれど、策はあるのでしょう？　糧食の件、忘れてはいないわよ」

「無論です。兵を損なわず、より戦闘時間を短縮させるための策、既に私の胸の内に」

「説明なさい」

さぁて、どのような策か……聞かせてもらおうか、桂花

「先ず曹操様は少数の兵を率い、砦の正面に展開してください。その間に夏侯惇・夏侯淵の両名は、残りの兵を率いて後方の崖に待機。本隊が銅鑼を鳴らし、盛大に攻撃の準備を匂わせればその誘いに乗った敵は必ずや外に出てくることでしょう。その後は曹操様は兵を退き、十分に砦から引き離したところで……」

「私と姉者で、敵を背後から叩くわけか」

「ええ」

ふむ、典型的な囮作戦だな
だが、囮が華琳なだけに、効果はあるだろう
華琳――曹操が少ない兵で攻撃を仕掛けると匂わせる
相手の兵は三千。当然勝てると思い、出てくるだろう
そこに、後ろから春蘭、秋蘭隊の奇襲、そして華琳との隊での挟撃
……これは、相手に同情するな
だが、この策に春蘭がまくし立てるように異を唱えた

「……ちょっと待て。それは何か？　華琳様に囮をしろと、そういうわけか！？」

「そうなるわね」

「何か問題が？」

「大ありだ！　華琳様にそんな危険なことをさせるわけにはいかん！」

「なら、あなたには他に有効な作戦があるとでも言うの？」

「烏合の衆なら、正面から叩き潰せば良かろう」

「……」

「……」

春蘭よ。さすがにその選択肢はいかがかと思うぞ……
華琳と桂花も無言で呆れてしまった

「油断した所に伏兵が現れれば、相手は大きく混乱するわ。混乱した烏合の衆はより倒しやすくなる。曹操様の貴重な時間と、もっと貴重な兵の損失を最小限にするなら、一番の良策と思うのだけれど？」

「な、なら、その誘いに乗らなければ？」

「……ふっ」

「な、なんだ！　その馬鹿にしたような……っ！」

春蘭が襲い掛かりそうになるのを俺が羽交い締めにして何とか押さえ込む。本当に馬鹿力だな……！
桂花はそれを見越してか、気にせずに華琳に続きを話す

「曹操様。相手は志を持たず、武を役立てることもせず、盗賊に身をやつすような単純な連中です。間違いなく、夏侯惇殿よりも容易く挑発に乗ってくるものかと……」

「……な、ななな……なんだとぉー！！！」

「落ち着け！……どう転んでも春蘭の負けだ」

「ええ、春蘭の負けね」

「か、華琳様ぁ……」

「……とはいえ、春蘭の心配ももっともよ。次善の策はあるのでしょうね」

「この近辺で拠点になりそうな城の見取り図は、既に揃えてあります。あの城の見取り図も確認済みですので……万が一こちらの誘いに乗らなかった場合は、城を内から攻め落とします」

流石、王佐の才と呼ばれるほどの逸材だ
恐らくは、糧食担当になった時から桂花の計画は始まっていたんだろうな
なんとまぁ……用意周到なことだ

「まぁ、出てこなかったら、俺が面白いもん見せてやるよ」

「あら、何を見せてくれるのかしら、孟」

「それは、その時になってのお楽しみさ」

「そう。では予定通り、桂花の策で行きましょう」

「華琳様！」

それでもやはり止めに入る春蘭
それだけ、主の事が心配なんだろう。……華琳が羨ましいものだ

「これだけ勝てる要素の揃った戦いに、囮のひとつも出来ないようでは……この先の覇道など、とても歩めないでしょうよ」

「その通りです。ただ賊を倒した程度では、誰の記憶にも残りません。ですが、最小の損失で最高の戦果を上げたとなれば曹孟徳の名は天下に広まりましょう」

「な、ならば……せめて、華琳様の護衛として、本隊に許緒を付けさせてもらう！　それでもダメか？」

「許緒は貴重な戦力よ。伏兵の戦力が下がるのは好ましくないのだけれど……」

「私が許緒の分まで暴れれば、戦力は同じだ。それで文句は無かろう！」

なんて無茶苦茶な計算だよ……
だが、華琳を守るために必死な春蘭が何とも、可愛いなぁ
俺は、そんなことを考えながら、ＳＵＮ・グラッシーＪｒ．？を掛ける
……ま、あの言葉を言わなければいいだけだ

「……分かったわよ。なら、囮部隊は曹操様と私、許緒。伏兵は夏

侯淵と夏侯惇。これでよろしいでしょうか、曹操様」

「ええ、それで――――」

「いや、伏兵はいらねぇ。囮だけでいいよ」

俺のこの言葉に、皆が驚いた表情でこちらを見てくる
特に、桂花は『なんで邪魔するのよ！』といった表情で睨んでくる
始末だ

「まぁ、俺に秘策あり。ってやつだ」

俺はＳＵＮ・グラッシーＪｒ．？をくいっと動かす
その様子を、訝しげに見る華琳達

「まぁ、いいわ。でも伏兵は配置するわ、それが条件。いいわね？
孟」

「ん、分かった」

こうして、俺の案が採用された
だが、俺はこのあと後悔することになる
俺は、何も知らずに悪の説明書を開いて読み始めた

「……」

「どうしたの、孟」

「華琳か……いや、少しな」

俺はもう一度ＳＵＮ・グラッシーＪｒ．？の説明書を開いた

『この度はオプションパーツ装着によって擬似目ビームα～γを発射可能な次元偏向眼鏡、ＳＵＮ・グラッシーＪｒ．？のお買い上げ、誠にありがとうございます。以下は本製品を安全かつ長くお使いいただくために重要な――――』

これを見たとき、つい……買わせる気だったのか？と疑ってしまっただが、問題はここじゃない。発射方法にあった

『ビームの発射方法
1．ＳＵＮ・グラッシーＪｒ．？を深く装着します
2．目の焦点を照射目標へ合わせ、十分に見つめます
3．おもいおもいのポーズを取りながら、『目からビィィ――――――ムッ！！』と力強く叫びます

※目付きの悪さに応じた、破壊的な威力のビームが照射されます。α、β、γ、その日の気分に合わせた阿鼻叫喚の地獄絵図をお楽しみください
注．今回は前作の一部を改良し、『目からビィィ――――――ムッ！！』と叫ばなければ発射できません。これにより、よりリアルにかっこよく演出をお楽しみただけます』

……音声認識なんて、入れんじゃねぇよ、ドクター……
恐らく、向こうの世界で、面白おかしく楽しんでいるんだろうなぁ……

「はぁ……憂鬱だ」

「少ししたら時間だから、準備はしておきなさい」

「ああ、分かった」

華琳は、所定の位置に戻る
しかし……こちらの手勢は本当に数えるほど
あまり、ミスはしたくないな

「あ、兄ちゃん。どうしたの？」

向こうからやってきたのは、華琳の護衛という大任を任された許緒だった

「ん？　許緒か」

「季衣でいいよー。春蘭様と秋蘭様も、真名で呼んで良いって言ってくれたし」

「へぇ……そうかい」

「そういえば、何か落ち込んでたみたいだけど……何かあったの？」

「まぁ……ちょっと緊張みたいなもんだ」

「そっか。ボクも曹操様の護衛なんて大役、緊張して来ちゃったよ〜」

「そうかい。まぁ、あまり気負わずに居とけ。もしかしたら、華琳の方に敵がいかないかもしれないしな」

「そうなの？」

「ああ」

俺が、ちゃんと言えたらな

「お前たちは俺が守ってやるよ」

「え……っ　あ……うん」

季衣は、キョトンとしたまま頷く

まぁ、このご時世だ。守ってやると言われたことが無いんだろうな

「こら、そこの二人ー！　遊んでないで早く来なさいよ！　作戦が始められないでしょう！」

「わかったよ。さ、行こうか季衣」

「うんっ！」

「時間ね。　桂花！」

「はっ！」

桂花の合図によって、銅鑼が鳴らされる
俺は、砦の城門の対角線上に立ち、構えを取る
……が

「うおおおおおおおっ！！！」

「……」

「……」

「……」

響き渡る銅鑼の音は、こちらの軍のもの
だが、響き渡る咆哮は、城門を飛び出してきた盗賊たちのもの

「……桂花」

「はい」

「これも作戦のうちかしら？」

「いえ……これはさすがに想定外でした……」

「連中、今の銅鑼の音を出撃の合図と勘違いしたのかしら？」

「はぁ。どうやら、そのようで……」

「まぁいいわ。孟！」

「ああ、行くぞ」

俺は、大きく息を吸い込む
狙うは、砦の城門。そこを睨みつけ――

「目からビィィィ――――――――ムッ！！！」

その声と共に、ＳＵＮ・グラッシーＪｒ．？のレンズが光り

キュゥゥゥンッ！！！

その光は、まっすぐに城門に吸い込まれていき――

ドカーン！！！

「……爆発した？」

中に火薬かなにかあったのだろうか？
城門を中心に何度か爆発し、収まった

「あ……あ、ああ……」

「うわぁ……すごーい」

「変態的な威力ね……孟」

「はは……は……」

「でも、目からビームとかいうの……恥ずかしくない？」

「……それを言うなよ」

その後、春蘭、秋蘭の伏兵隊の突撃によって、盗賊団は全滅
しかし、南華老仙の古書を持ち逃げした三人組は見つからずじまいだった
そこまでは良かったのだが、途中の過程に怒りを爆発させている者がいた

「私の策はアンタなんか居なくても十分に運用できたわよ！」

大声で俺に文句を言ってるのは桂花だった

「わかったわかった。兵の損害も物凄く少なかったし、戦闘時間も大幅に短縮できたから良かったじゃないか」

「なら、今度からはあの光を放つのを使って戦いなさいよ」

「やだ」

二度と使うかよ、あんなふざけた眼鏡
こんな風に返すと桂花が更に怒り、それを秋蘭や季衣が宥める

で、結局はお目当ての品は見つけられなかったが、盗賊団を壊滅させたので一旦、陳留に帰ることにした

「そう言えば、見つからなかったな。太平……なんだったか？」

「うむ、大変用心の書だな」

「え……？」

「……太平要術よ」

「……」

「……」

「……」

華琳の発言の後、皆が黙って春蘭を見やる
その視線に春蘭が堪らずに弁解し始めた

「言ったよな！わたし、そう言ったよな！」

俺はその哀れな姿を見て、いたたまれなくなり
二度、春蘭の肩を軽く叩いて、頭を撫でてやった
だが、この俺の行動に春蘭が噛み付いてきた

「ええい！貴様なんぞに慰められても嬉しくもなんともないわー！」

なんて言いながら秋蘭に縋り付いていた

なんか、可愛いな

「ま、まぁ……無知な盗賊に薪にでもされたか、落城の時に燃え落ちたのか。……まぁ、変わりに桂花と季衣という得難い宝が手に入ったのだから、良しとしましょう」

「お、季衣は結局俺たちと来るのかい？」

「うん！　それにボクの村も、曹操様が治めてくれることになったんだ。だから今度はボクが、曹操様を守るんだよ」

「へぇ……そうなのかい？　というか、ここも治めるのかい？華琳」

「ええ。この当たりを治めていた州牧が、盗賊に恐れをなして逃げ出したらしいの。そういうことだから、私が州牧の任も引き継いで、この土地を治めることになったの」

「其れに、季衣には今回の武功をもって、華琳様の親衛隊を任せることになった」

いつの間にか復活した春蘭が季衣の親衛隊任命について説明する

「へぇ！そうなのかい？　良かったな、季衣」

「これからもよろしくね、兄ちゃん！」

「ああ、よろしくな。季衣」

「さて。後は、桂花のことだけれど……」

「……はい」

そう言えば、出撃前に桂花が言い切った、糧食半分の件も残っていたか
あれだけ、大見得きって言った事だ、さぞかし大成功だったのだろうな

「桂花。最初にした約束、覚えているわよね？」

「……はい」

「城を目の前にして言うのも何だけれど、私……今とてもお腹が空いているの。分かる？」

「……はい」

ということは……？

「糧食、足らなかったのかい？」

「まぁ……そういうことだな」

「あらら……」

因みに、俺はカバンにあったおにぎりを食っていた
華琳や季衣達にあげていたら、二日で無くなった。……早すぎだろ

「話せば長くなるのだが……」

結論から言えば、桂花は華琳との賭けに負けた
糧食は昨日の晩で尽き、ここにいる誰もが朝食を食べていないらしい
原因は、こちらの損害が極端に少なく、兵が予想以上に残ったこと
と……

「ですが、曹操様。ひとつだけ言わせていただければ、それはこの季衣が……」

「にゃ？」

「不可抗力や予測出来ない事態が起こるのが、戦場の常よ。それを言い訳にするのは、適切な予測が出来ない、無能者のすることだと思うのだけれど？」

「そ、それはそうですが……」

あらら、凹んじまったな
まぁ、確かに軍師というのは、常に誰よりも状況を一歩も二歩も先を読むものだ
だが、今回ばかりは同情を禁じえない
季衣はあの小ささで、俺たちの十倍以上の糧食をたいらげていたらしい。確かに、あれだけのパワーを出すためと言えば、納得せざるを得ないが……
さすがの俺も、初めて聞いたときはショックで腰が抜けるかと思った。まるで悟〇だな

まぁ、一食あたりの小さな誤差だけならともかく、何回も続けば無視できなくなる数字になる
その誤差が桂花の予想を超えたのが、城に帰りに着く直前の、昨夜の出来事だったそうな

「え？　えっと……ボク、何か悪いこと、した？」

「いや、季衣は別に悪くない。気にするな」

首を傾げる季衣に、春蘭が「悪くない」と語りかける
確かに、季衣は何も知らなかったわけで…誰も文句の言いようがない

「まぁまぁ、今回は大目に見てやってもいいんじゃないかい？　半分は俺のせいでもあるんだしな」

「そ、そうよ！　元はといえば、アンタが訳わかんない物使って、兵をあんなに残すから……っ！」

「言ったでしょう？桂花。不可抗力や予測出来ない事態が起こるのが、戦場の常と。それに、どんな約束でも反故にすることは私の信用に関わるわ。少なくとも、無かったことにする事だけは出来ないわね」

「……わかりました。最後の糧食の管理が出来なかったのは、私の不始末。首を刎ねるなり、思うままにしてくださいませ」

「ふむ……」

一息付き、春蘭が桂花の前に出る―――が、桂花はそれを拒む

「ですが、せめて……最後は、この夏侯惇などではなく、曹操様の手で……！」

「……」

無表情だが、春蘭の額に青筋が浮かび上がる

耐えろ！春蘭！

「ふむ……とは言え、今回の遠征の功績を無視することはできないのもまた事実。……いいわ、死刑を減刑して、おしおきだけで許してあげる」

「曹操様……っ！」

「それから、季衣と共に、私を華琳と呼ぶことを許しましょう。より一層、奮起して仕えるように」

「あ……ありがとうございます！　華琳様っ！」

今にも泣き出さんばかりに喜ぶ、桂花
何時の間にやら、俺への怒りはどこへやらだな

「ふふっ。なら、桂花は城に戻ったら、私の部屋に来なさい。たっぷり……可愛がってあげる」

「はい……っ！」

……え？

「むぅ……」

「……いいなぁ」

えっと……華琳や春蘭、秋蘭の反応を見る限りでは、何やらピンク色の雰囲気が……
まさか、華琳って……レズビアンなのか？

確かに、可愛い女の子は愛でたくなるが……華琳も同じ人種だったとはねぇ

「……ははっ、まぁ、知らなくていい世界もあるしな」

「ねぇねぇ、兄ちゃん。ボク、お腹すいたよー。何か食べに行こうよぅ」

「そうだな。片付けが終わったら、みんなで何か食べに行こうか」

「やったぁ！　それじゃ、早く帰りましょうっ！」

季衣は待ちきれないとばかりに、春蘭と秋蘭を引っ張っていく

……流石、フードファイターだな。……違うか

なんて、考えていると、横に華琳がやってきていた

「いや、まさか華琳が美少女を好むとは、恐れ入ったよ」

「あら、いけないかしら？」

「いや。俺も美少女は好きだぞ？」

「へぇ？　……なら、この世界で会った人物で一番の美少女は誰かしら？」

俺が、そうだなぁ……と悩んでいるのを華琳が微笑んでみている

俺はつい、柄にもなく照れてしまい、それを楽しそうに観る華琳
それがたまらなく悔しくあり、お返しとばかりにこう答えてみた

「華琳、君だ」

「へっ！？　あ、そ……そう？　ありがとう／／／」

おっかなびっくりした表情の後に、照れながらお礼を言われて、ニコリ微笑む俺
華琳もそれが悔しいのか、不意に俺を蹴り飛ばして馬から蹴落す

「って、今のは危ないだろうが！」

「ふん、知らないわよ」

ええ～……それはあんまりだぜ
そんな俺を、桂花が見下ろしながら嘲笑う
そのまま、俺を助けるわけでもなく、すたこらと行ってしまう
くっ……！　覚えていろ、桂花

こうして、盗賊団を壊滅させた俺たちは陳留に帰還した

第五幕　ｖｓ黄巾盗賊団（後書き）

戦闘シーンは今回無くしました
せっかく、ＳＵＮ・グラッシーＪｒ．？があるんだから♪

「～かい」は主人公の口癖です

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5189u/

真・恋姫無双　時空の旅人

2011年10月9日06時15分発行